

宮澤弘幸墓参と「宮澤・レーン事件を考える集い」



上＝講演する荻野富士夫・小樽商科大学名誉教授。

右＝30 数年前から宮澤弘幸スパイ冤罪事件に取り組んできた経過を報告する山野井孝有さん



78 年前の 1941 年 12 月 8 日、スパイ冤罪事件で特高に検挙され、暗黒裁判で懲役 15 年とされた北大生・宮澤弘幸は網走刑務所に収監された。戦後に釈放されたが 1947 年 2 月 22 日、27 歳で事実上獄死した。その命日の 2 月 22 日午後、新宿・常圓寺で、顕彰追悼墓参と「宮澤・レーン事件を考える集い」が開かれ、北大OBを中心に約 60 人が参加した。

安倍政権の国民を再び戦争への道へ引きずり込もうとする暴走が続く中、墓前で宮澤弘幸に対する国家権力による弾圧・犯罪を許さぬ思いを新たにした。

集いでは、荻野富士夫・小樽商大名誉教授が「よみがえる戦時体制一大学と教育をめぐる」と題して講演した。荻野さんは、A413 頁にわたる詳細なレジュメをもとに、戦前の教育の思想統制が戦争への道とセットになって強行された経過を詳しく説明した。そして宮澤・レーン事件を戦時下の北大の中に置いてみると、理系の帝国大学ゆえに国家の総力戦遂行体制を大学自らが自覚的に推進した。だからスパイ冤罪事件に対しても冷徹が対応をしたのではないかと提起した。

続いて、30 数年前から宮澤弘幸スパイ冤罪事件の残酷さを訴えてきた山野井孝有さん（毎日新聞OB、真相を広める会元代表）が、この事件を告発してきた上田誠吉弁護士、宮澤弘幸の義弟・秋間浩さん、藪下彰治朗朝日新聞記者（いずれも故人）を回想して発言した。伊藤陽一さん（北大OB、法政大学統計研究所元所長）は、今大問題となっている統計不正問題について、「統計不正問題をどうとらえるか」について専門的見地から報告した。

安倍政権の暴走の先には、国家権力による弾圧と一体となった戦争体制が待ち構えていることは間違いない。北大OBのみなさんが「宮澤・レーン事件を忘れない！」と墓参と集いを継続している努力を讃えたい。



思想統制の犠牲者悼む

スパイ冤罪・宮沢さん 50人墓参り

戦時中にいわれのないスパイ容疑で逮捕された元北海道帝国大学生、宮沢弘幸さんが釈放後に27歳で死去してから22日で72年。北大の卒業生やゆかりの人

宮沢さんは日米開戦当日の1941年12月

たち約50人が同日、新宿区西新宿7の常円寺にある墓を訪れ「受難を忘れない」と誓い合った。

8日、英語講師だったレーン夫妻の官舎を訪ねた際に、札幌市で特高警察に逮捕された。旅行中に見た海軍飛行場の様子を夫妻に話したことがスパイ行為とみなされたとされる。だが、飛行場の様子は当時すでに広く知られており、逮捕は軍機保護法の拡大解釈だった。宮沢さんは懲役15年の判決を受け、戦後に釈放されたが、服役中にかかった結核の影響で、47年2月22日に早世した。

宮沢弘幸さんの墓を訪れた関係者ら—東京都新宿区で

参加者は墓参後に「事件を考える集い」を開催。治安維持法に詳しい荻野富士夫・小樽商科大名誉教授が戦前の思想統制や教育統制の流れを語り、スパイ冤罪事件が起きた時代背景を解説した。

【伊藤直孝】

思想統制の歴史学ぶ集い

北大スパイえん罪 繰り返し返させない

戦前のスパイえん罪事件の「宮沢・レーン事件」で弾圧された北大生・宮沢弘幸さんの墓参し、同事件のD

争開戦の1941年12月8日、軍事機密を米

授が講演。教育勅語までさかのぼり、戦時体制下での教育・思想統制の強化について詳しく紹介しました。安倍政権の教育基本法改悪、秘密保護法制定など、戦前回帰の動きにふれ、「いま時代の危険な曲がり角を越えている」と強調しました。

参加者の懇談では、宮沢さんのような犠牲を繰り返さないように、事件の真相をさらにひろげたい、との決意が出されました。

参加者の懇談では、宮沢さんのような犠牲を繰り返さないように、事件の真相をさらにひろげたい、との決意が出されました。